

メニューサーベイにおける調査サンプル数と出現料理種類数との関係
 大阪薫英女短大 河野友美 河野食品研 ○山口米子

目的 前報の「10年間の料理の変化」のデータを基に、メニューサーベイにおいてサンプル数と出現料理の種類数との関係を明確にすることにより、サンプル集団と母集団との関係を知り、出現料理の種類数の上限値及び、妥当な抽出サンプル数を推定することを目的とする。

方法 サンプル数の増加につれ、出現料理の種類数がどのように変動するかを、コンピューターを用いてグラフ化した。次いで、得た変量から最小二乗法を用いて数式を求めた。この式を基に、サンプル集団の特性、年代別比較を行った。

結果 最小二乗法によって得られた式は、いずれも双曲線を示し、1967年大阪($y - 331.8456$) \times ($x + 480.7195$) = -158534.1094 、1967年東京($y - 425.5158$) \times ($x + 526.2672$) = -218082.8903 、1977年大阪($y - 582.2005$) \times ($x + 534.9515$) = -293651.5044 であった。また、各式より得られた出現料理の種類数の推定上限値は、1967年大阪331、1967年東京425、1977年大阪582であった。それぞれの年におけるメニューサーベイで得られた料理種類数は、この推定上限値に対して各々80.7% (1967年大阪)、81.6% (1967年東京)、79.2% (1977年大阪) であった。これらのことから、メニューサーベイにおいて調査サンプル数を1900~2000とれば、推定全料理種類の約80%のものが得られることが判明した。